

leap forward



第11号 (通算18号)

校内マラソン大会 (2/7)

寒かったけれど、アツかった!!

冷たい風に吹きつけられ小雨も降る中、2月7日(金)に校内マラソン大会が開催されました。1学年の女子・男子、2学年の女子・男子、最後に駅伝という流れで執り行われました。

例年より暖かくなったとはいえ、小雨も降り、芯から冷えるような寒さにもかかわらず、懸命に走る生徒の姿や、走っている生徒を全力で応援する出番待ちの生徒の姿は、全くその寒さを感じさせませんでした。



窓から応援する3年生

また進路が決定している3年生は、安全に行事を運営できるよう協力してくれましたし、試験を控えている3年生も、空き時間を利用し、教室の窓から声援を送っていました。どんな苦難も全員で乗り越えようとする姿勢は、私たち教員も見習わなければ



ならないと感じました。

そして、疲れた体・冷えた体に染み渡るマラソン大会恒例のうどん!協力してくださった保護者の方々、本当にお忙しい中ありがとうございました。

【結果】(イニシャルで表記しています。)

●駅伝の部	●総合の部	●区間賞	●女子マラソン	●男子マラソン
優勝 1年2組	優勝 1年2組	2区 Y.N	3位 S.U	1位 K.T
2位 2年2組	2位 2年4組	3区 Y.T	6位 H.O	2位 K.S
3位 2年1組		4区 T.F	7位 R.M	4位 J.S
		5区 K.S	8位 R.F	5位 K.K
		7区 C.F		6位 A.F
		8区 T.S		7位 T.H
				8位 Y.M



「ふるさとの未来を担う高校生育成事業」

本取組は、ふるさとに対する愛着や誇りを育み、貢献したいという意識を醸成する「ふるさと教育」の取組によって、定着と人口減少抑制を目的としたものです。

今回2年生は、自らが関心を持つ地域の課題をテーマとし、解決法を模索して

ふるさとへの愛着を育成するとともに、創造力・発信力を身に付け、これからの長崎の発展に寄与する意識を持つということを目指して、約一年間奮闘してきました。自分たちで調べられることはないか、どうしたら地域の課題を解決に近づけることができるのかを班の中で分担し、限られた時間の中で懸命にまとめることができました。まだまだ、推敲が必要な箇所はそれぞれあったものの、進路選択の際に「このふるさと教育から興味を持った」との意見も届けられ、この活動の意義が少しでも見出せたのではないかと考えています。お忙しい中、ご観覧いただきありがとうございました。



祝意に満ちた卒業式

簡略化…できることをしよう！

新型コロナウイルスが猛威を振るい世間を騒がす中、先日総理から「全国小中高休校の要請」がありました。本校もその通達を受け、長崎県からの指示を包含し、卒業式の縮小化を決定しました。

一生に一度の卒業式。例年であれば、式後に卒業生と学年担当の先生方が肩を組み、大地讃頌を大声で歌う「卒業生を送る会」という西陵伝統の会が行われますが、今回は縮小によりカットされてしまいました。

人生の思い出の一端となる高校の卒業式。一見例年より寂しい卒業式になるかと思われましたが……いやなんの！！1・2年生や先生方の何とか3年生を盛大に送ってあげたいという思いから、様々なサプライズが隠されていたのです。まず1年生は会場の設営を、2年生は例年では実施していない3年生の教室の飾りつけを始めました。これはある先生のアイデアによるもので、それぞれクラスごとに個性豊かな教室が完成しました。休日にも関わらず、卒業式の前日まで登校し教室の飾りつけを行っていた生徒もおり、3年生に何か残したいという強い意志が感じられました。



卒業式当日は、校長先生の「縮小化され、在校生も参加できない卒業式だけでも、例年と変わらず祝意に満ちた卒業式です。」とのお言葉。在校生代表に抜擢され、ずっと練習を続けていた6組のMくん。唯一の在校生参加者として本番はびしっと送辞の責務を果たしてくれました。原田マハの小説の一節を用いた涙ながらの送辞は、卒業生だけでなく卒業生の保護者の心をもうち、式の感動を高めてくれました。答辞は女子剣道部主将のMさん。

主将としてうまくいかなかったこともあったけれど、自分を支えてくれた人たちのおかげで頑張れた。また、9.11アメリカ同時多発テロ事件など緊迫した社会の中で生まれた彼女たちは、今ある社会の問題を自分達の問題であるとして、よりよい世界をまだ見ぬ未来世代へと託さなければならないという彼女の思いが表れた答辞でした。

そして最大のサプライズは、偶然なる中庭での大合唱でした。たまたま練習を行っていた吹奏楽部が『You can't stop the beat』を演奏し、校舎全体が「うおおおおお」という大歓声に包まれました。そして最後には在校生からの「センキュー！！」、卒業生からの「センキュー！！」互いに感謝の念と敬意を表現したその光景は、今までにない感動と、西陵高校生としての誇らしさを感じました。野球部からのエールや大地讃頌・心の中にきらめいての大合唱は、中庭から学校全体に響き渡り、令和2年3月1日に催された卒業式は幕を閉じました。



このように素敵な卒業式を行うことができたのは、二つの理由があります。一つは式の縮小化にもかかわらず、32回生の生徒は嫌な顔一つせず、しっかりと自分の将来を見据えて胸を張って卒業していったこと。二つ目は、どうにかして3年生を盛大に送り出したいという在校生の並々ならぬ思いがあったからです。自分ができることは何か、3年生がどうしたら喜んでくれるか懸命に考えたからです。その思いも相まって、より特別な卒業式になりました。



おめでとう